

## 比較文化Ⅱ [第8回]

丸山純 (jun@site-shara.net)

### ●家族型から世界と歴史を見る……エマニュアル・トッド

#### ▼エマニュエル・トッド (Emmanuel Todd)

フランスの人口学・歴史学・家族人類学者 (1951 年生まれ)

作家のポール・ニザンの孫、ジャーナリストのオリヴィエ・トッドの息子

ユダヤ系だが、家族が第二次世界大戦中にカトリックに改宗したため、ユダヤ人としての教育は受けていない

フランス国立人口学研究所 (INED) に所属

#### ▼なぜトッドが注目されるのか？

1976年に26歳でソ連の崩壊を予言 (実際の崩壊は1991年)

1995年の仏大統領選で、シラクの当選を予言

9.11 (2001) の1年後に『帝国以後』でアメリカ帝国の欺瞞性を指摘し、衰退を予言

仏独の協力を提言し、両国をイラク戦争反対に導く

ヨーロッパの統合 (EU) に対して否定的

日本の役割をかなり高く評価、常任理事国入りに賛同

日本とイランの核武装を奨励

#### ●トッドの出発点

なぜ一定の地域でのみ共産主義が定着し、他の地域では定着しないのか

共産主義が確立しているソ連、中国、中部イタリア (トスカーナ地方) は、みな「外婚制共同体家族」で、ぴったり重なる

家族構造とイデオロギーには相関関係があるのではないか

1983年の『第三惑星』で世界の8つの家族型を示し、イデオロギーとの密接な関連を主張

絶対核家族／平等主義核家族／直系 (権威主義的) 家族／外婚制共同体家族／内婚制共同体家族／非対称共同体家族／アノミー的家族／アフリカ・システム

#### ▼家族型と社会現象 (『世界像革命』p.41)

『第三惑星』 で定義された 家族型	地域別	家族構造の要素				社会的帰結	
		女性の地位	親子関係 (権威)	兄弟関係 (平等)	近親相姦の 規制法	教育潜在力	イデオロギー の形態
権威主義的 (直系) 家族	ドイツ	双系	縦型	不平等	強い外婚制	極めて大	自民族中心的 権威主義
	日本・ユダヤ	双系	縦型	不平等	弱い規制	極めて大	
絶対核家族	イングランド	双系 (母系的 偏り)	非縦型	無関心	強い外婚制	中 (+)	自由主義的個人主義
平等主義的核 家族	北フランス	双系 (父系的 偏り)	非縦型	平等	強い外婚制	中	平等主義的個人主義
外婚制共同体 家族	ロシア	父系 (弱い)	縦型	平等	強い外婚制	中	共産主義
	中国	父系 (中ぐら い)	縦型	平等	強い外婚制	中 (-)	
	北インド	父系 (強い)	縦型	平等	強い外婚制	小	
アノミー的 家族	タイ	双系 (母系的 偏り)	非縦型	無関心	弱い規制	中 (+)	概念的不明瞭 (イデオロギー のアノミー)
	中央アメリカ	双系 (父系的 偏り)	非縦型	無関心	弱い規制	中 (-)	
内婚制共同体 家族	アラブ圏	父系 (強い)	非縦型	平等	父方平行いと こ優先婚	小	イスラム
非対称共同体 家族	タミル・ナドゥ (南インド)	父系 (弱い)	縦型	平等	非対称婚姻	中	カースト制＋ 共産主義
	ケララ (南 インド)	母系	縦型	平等	非対称婚姻	大	

#### ▼婚姻制度といとこ婚

外婚制……自己の属する集団の内部で配偶者を求めることが許されずに、集団外の者と結婚するよう規定されている婚姻制度

内婚制……婚姻の相手を一定の集団内に求め、成員外の者との婚姻を禁ずる制度

カースト、親族、部族、地域集団、階級、教派、職業集団、人種集団など

平行いとこ……親どうしが同性の兄弟または姉妹である関係

自分と自分の父親の兄弟 (父方のおじ) の子

自分と自分の母親の姉妹 (母方のおば) の子

交差いとこ……親どうしが異性の姉妹または兄弟である関係

自分と自分の父親の姉妹 (父方のおば) の子

自分と自分の母親の兄弟 (母方のおじ) の子

## ●世界を8つの家族型に分類

### ▼絶対核家族 (la famille nucléaire absolue)

子どもは成人すると独立。親子は独立的であり、兄弟の平等に無関心。いとこ婚は禁止。遺産は遺言に従って分配。基本的価値は自由である。世界の他の地域に比べ、女性の地位は高い

基本的価値が自由であることから、子どもの教育には熱心ではない。個人主義、自由経済を好む。移動性が高い

イングランド、ウェールズ北部、マン島、オランダ、デンマーク、ノルウェー南部、フランス（フィニステール県を除いたブルターニュとペイ・ド・ラ・ロワール地域圏）、イングランド系のアメリカ合衆国、カナダ（ケベック州を除く）、オーストラリア、ニュージーランドなど

### ▼平等主義核家族 (la famille nucléaire égalitaire)

子どもは成人すると独立。親子は独立的であり、兄弟は平等。遺産は兄弟で均等に分配。いとこ婚は禁止

基本的価値は自由と平等。女性の地位は、娘が遺産分割に加わる社会（フランス北部）では高いが、そうでない地域ではやや低い。個人主義であり、子どもの教育には熱心ではない  
パリを中心とするフランス北部、スペイン中南部、ポルトガル北東部、ギリシャ、イタリア南部、ポーランド、ルーマニア、ラテンアメリカ、エチオピアなど

### ▼直系家族 (la famille souche)

子どものうち一人（一般に長男）は親元に残る。親は子に対し権威的であり、兄弟は不平等。日本とユダヤではいとこ婚が許され、他では禁止

基本的価値は権威と不平等。子どもの教育に熱心。女性の地位は比較的高い。秩序と安定を好み、政権交代が少ない。自民族中心主義が見られる

ドイツ、スウェーデン、オーストリア、スイス、ルクセンブルク、ベルギー、フランス南部（地中海沿岸を除く）、スコットランド、ウェールズ南部、アイルランド、ノルウェー北西部、スペイン北部（バスク）、ポルトガル北西部、日本、朝鮮半島、台湾、ユダヤ人社会、ロマ、カナダのケベック州など。イタリア北部にも弱く分布し、中国の華南に痕跡の影響がある。古代ギリシャのアテネもこの形態だった

### ▼外婚制共同体家族 (la famille communautaire exogame)

息子はすべて親元に残り、大家族を作る。親は子に対し権威的であり、兄弟は平等。いとこ

婚は禁止

基本的価値は権威と平等。これから、共産主義との親和性が高い。子どもの教育には熱心ではない。女性の地位は一般に低いが、ロシアは北欧の影響により例外的に高い。

ロシア、フィンランド、旧ユーゴスラビア、ブルガリア、ハンガリー、モンゴル、中国、インド北部、ベトナム、キューバ、フランスのリムーザン地域圏およびラングドック＝ルシヨン地域圏とコートダジュール、イタリア中部（トスカーナ州やラツィオ州など）など

### ▼内婚制共同体家族 (la famille communautaire endogame)

息子はすべて親元に残り、大家族を作る。親の権威は形式的であり、兄弟は平等。父方平行いとこの結婚が優先される。権威よりも慣習が優先する

イスラム教との親和性が高い。子どもの教育には熱心ではない。女性の地位は低い  
トルコなどの西アジア、中央アジア、北アフリカ、フランス領コルシカ島に見られる

### ▼非対称共同体家族 (la famille communautaire asymétrique)

母系のいとこの結婚が優先。親は子に対し権威的であり、兄弟姉妹は兄と妹、または姉と弟は連帯するが、同性では連帯しない。子どもの教育に熱心。女性の地位は高い。カースト制度において自らを下位に位置づける

インド南部に見られる

### ▼アノミー的家族 (la famille anomique)

基本的に絶対核家族と同じであるが、はっきりした家族の規則はない。社会の結束が弱い。宗教に寛容であり、上座部仏教を中心としてイスラム教やカトリックも存在する

東南アジア（ベトナムを除く）、太平洋、マダガスカル、アメリカ先住民に見られる

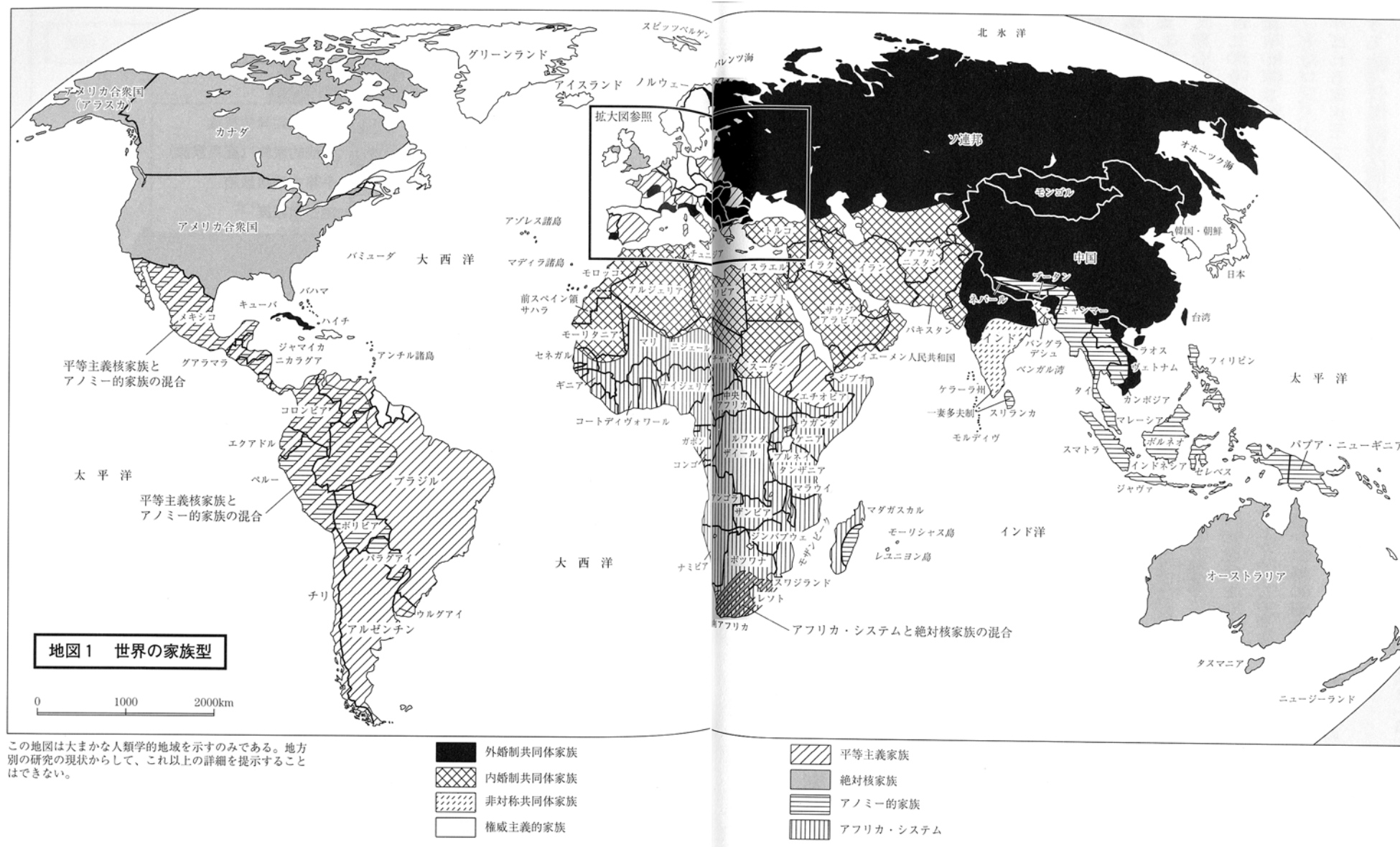
### ▼アフリカ・システム (le système des familiaux africains)

一夫多妻が普通に見られる。この一夫多妻は母子家庭の集まりに近く、父親の下に統合されるものではない。女性の地位は不定だが、必ずしも低くはない。離婚率が高い。それ以外は多様であり、民族により共同体家族的でも直系家族的でもあり得る

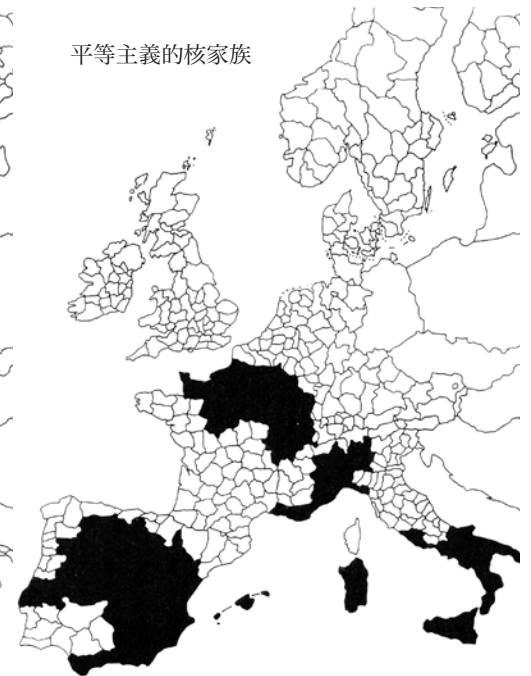
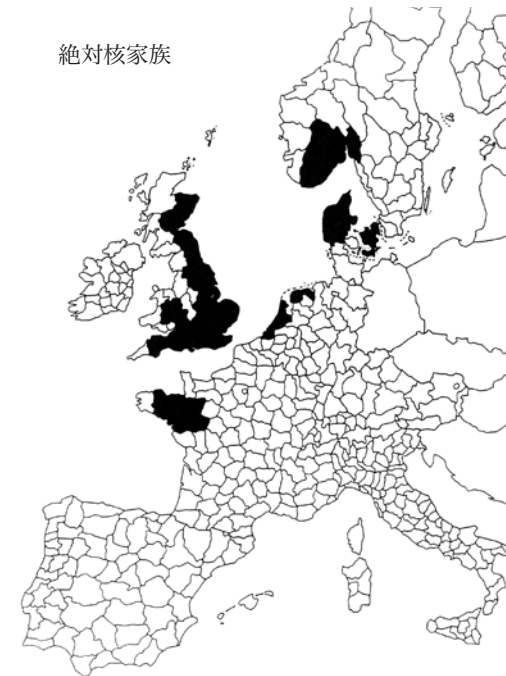
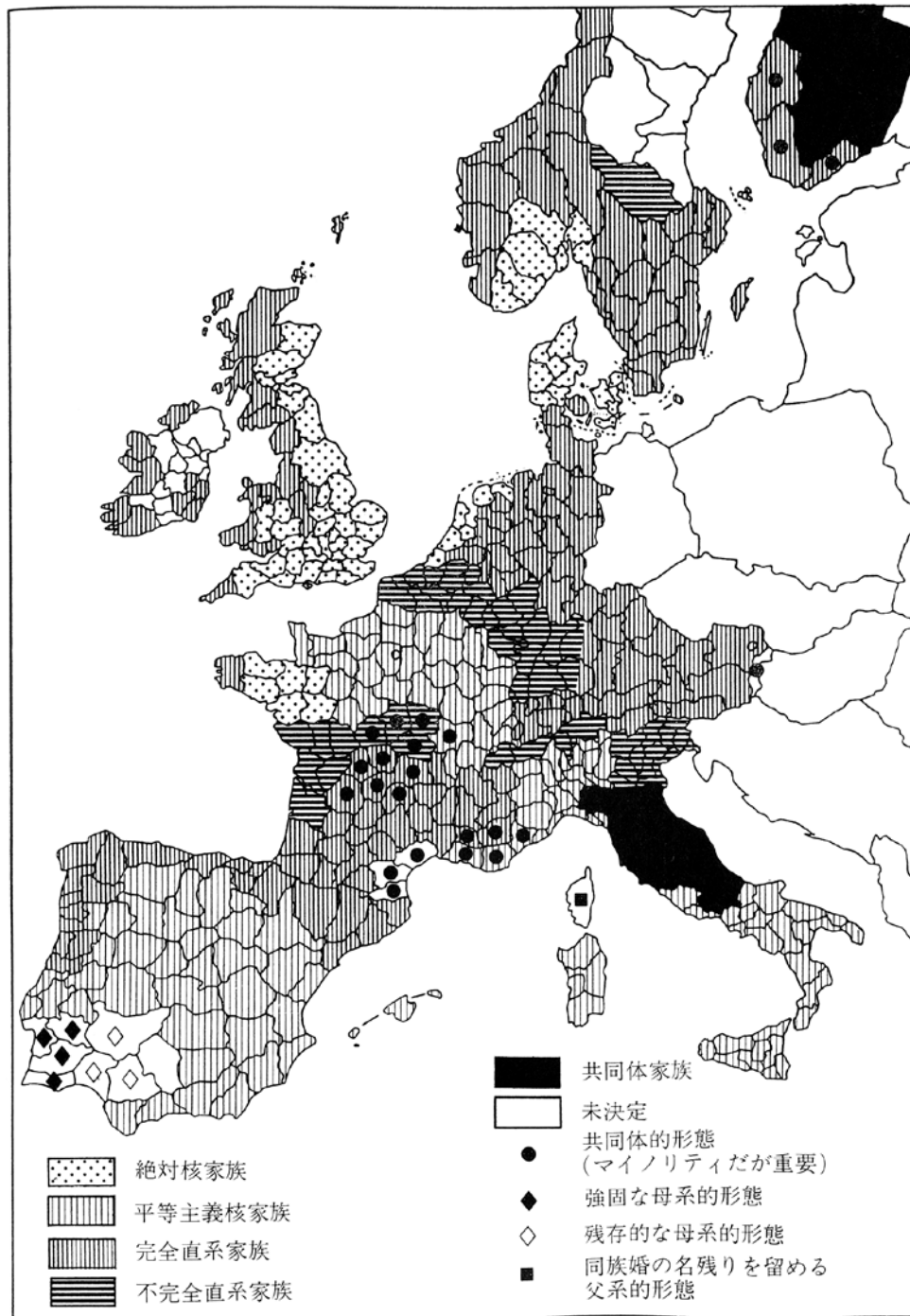
北アフリカとエチオピアを除くアフリカに見られる

(Wikipediaの解説を一部改変)

## ●世界の家族型







フィン人の伝統的類型  
 ハンガリーの残存的類型  
 共同体の形態を特定したモノグラフィー  
 最高の集中  
 頻繁に見られる

## ●ヨーロッパにおける家族型と歴史的事象の関連

### ▼『新ヨーロッパ大全』に見る4つの家族型

対象を西ヨーロッパのカトリック圏（宗教改革以前）に限り、483の地域（ほぼ県単位）に区切って、それぞれの家族型を割り出す

絶対核家族／平等主義核家族／直系家族／外婚制共同体家族の4つ

親子関係が自由主義的か権威主義的か／兄弟関係が平等主義的か差別主義的か

親子関係については、成人（結婚）した子どもの親の家への同居の有無

兄弟関係については、遺産相続規則

		親子関係	
		自由	権威
兄弟関係	平等	自由・平等 平等主義核家族	権威・平等 外婚制共同体家族
	非平等	自由・非平等 絶対核家族	権威・非平等 直系家族

絶対核家族	グレート・ブリテン島の大部分（西側沿岸部を除く）、オランダの主要部（沿岸部）、デンマーク主要部、ノルウェー南部、ブルターニュ（フィニステールは除く）
平等主義核家族	パリ盆地を中心とする北フランス、イタリア北東部（ロンバルディア、ピエモンテ）およびフランスの地中海沿岸部、イタリア南部とサルディニア、シチリア、スペインの大部分（北部沿岸部を除く）とポルトガル中部
直系家族	ドイツ圏全域（オーストリア、ドイツ語圏スイスを含む）、スウェーデン、ノルウェーの大部分（南部を除く）、スコットランドの大部分（東部を除く）とウェールズを含むグレート・ブリテン島の西側沿岸部、アイルランド、ベルギー、中央山塊を中心とするフランス南部（オック語地域）、スペインの北部沿岸部およびポルトガル北部
外婚制共同体家族	イタリア中部（トスカーナ）、フィンランド

### ▼ある地域の心性・気質は、驚くほど安定・不変である

「外婚制共同体家族」は、ユーラシア大陸の主要部（ハンガリー、ユーゴスラヴィア、ブルガリア、ロシア、中国、インド北部）を占める有力な型であるが、西ヨーロッパでは非常に稀

「直系家族」は、西ヨーロッパでは最も有力であるが、他には日本と韓国・朝鮮にのみ見られる

「絶対核家族」と「平等主義核家族」は、まったく西ヨーロッパ的な家族型で、植民による新世界への普及を除けば、世界の他の地域には見られない

## ●家族型と宗教改革の受容

ヨーロッパの宗教改革は、家族型、識字率、およびローマからの距離に基づいて決定された  
プロテスタントの教義は、「直系家族」に最も強く訴えるものだった

ドイツ北部地方の小貴族が積極的に受容 → 反マックス・ヴェーバー

聖書を自分で読む＝識字化の高さが必要

救霊予定説での権威的で不平等な人間の扱いは、権威的な親子関係と不平等な兄弟関係を持つ直系家族と一致する

「直系家族」は習得した文化の継承がしやすいため、識字率も高い

バイエルン州やオーストリア、スイスはローマに近いために、またアイルランドやスペイン北部は識字率が低いために、直系家族にも関わらずカトリックにとどまった

イングランドやオランダは「絶対核家族」であり、親子関係は権威主義的ではないが、平等への無関心、比較的高い識字率、ローマからの遠さにより、プロテスタントに移行した

しかし予定説は捨てられ、自由意志を尊重するアルミニウス主義を採った

「平等主義核家族」地域は、トリエント公会議（1545～63）によって、救済の平等と人間の自由意思の観念で再編成されて自由と平等に価値を見いだしていたため、権威主義で不平等のプロテスタンティズムを受容しなかった

## ▼識字化と脱キリスト教化の進展、近代化

自由で平等な平等主義核家族の地域では、キリスト教そのものに無関心になっていった

フランス北部、スペイン中南部、ポルトガル南部、イタリア南部で 1730 年頃から始まっている

ミサ出席率の低下として計測

17世紀の科学革命（無知蒙昧や窮屈な戒律からの解放）

プロテスタント地域の脱宗教化はずっと遅れて 1880 年頃から始まっている。

1859 年に出版されたダーウィンの『種の起源』が聖書の創造論を否定したことによる（神の死）

直系家族地帯のカトリック（ベルギー、カトリック・ドイツ、オーストリア、スペイン北部、フランス南部、アイルランド）は、1965～90 年頃まで信仰を守り続けた

識字率の向上と脱キリスト教化が一致すると、社会が「近代化」され、出生調節がおこなわれる

フランスのパリ盆地周辺は脱キリスト教化の先進地帯で、識字化が然るべき水準に達したため、いち早く1770～1830年に出生率が低下

この頃、識字化の先進国（ドイツ、スウェーデン）では、まだ脱キリスト教化が進展していない

他の脱キリスト教化の先進地帯（スペイン、南イタリア）では識字化が進展していない

### ▼なぜ文化的中進国であったイギリスで産業革命が起こったのか？

イングランドは「絶対核家族」のため、子どもに対する統制力が弱い

達成された識字化が次の世代で後戻りすることもあった

当初イギリスで発展した「石炭・鉄鉱・繊維」という工業形態は、労働者の文化的水準の高さを必要としない（ドイツやスウェーデンの重工業は水準の高さが必要）

子どもが親元を離れて自立しやすい→労働人口が都市に集中

平等に対して無関心なため、資本家－労働者という身分制が成立

人間は異なるものという前提があるので、搾取も気にならない

### ▼フランス革命はなぜ自由と平等を掲げるのか？

識字化と脱キリスト教化が進展していくと、神の不在を埋めようと、近代イデオロギーが登場してくる

その最初の発現が、フランス革命（1789～1794）

いち早く脱キリスト教化したパリ盆地周辺の平等主義核家族

### ▼家族型とイデオロギー・システムの関係

階級を基盤として地上の理想の国の建設を目指す → 「社会主義イデオロギー」

民族を基盤としてそれを目指す → 「民族主義イデオロギー」

この左と右のイデオロギーは、それぞれの地域で同じ価値を共有

脱キリスト教化が完了していない地域で、キリスト教勢力が近代イデオロギーから身を守るために、近代的政党を作り出す → 「反動的宗教イデオロギー」

	イデオロギーシステム に伝えられる 基本的価値	社会主義 イデオロギー	民族主義 イデオロギー	反動的宗教 イデオロギー
平等主義核家族	自由と平等	無政府社会主義	自由軍国主義	キリスト教共和主義
直系家族	権威と不平等	社会民主主義	自民族中心主義	キリスト教民主主義
共同体家族	権威と平等	共産主義	ファシズム	—
絶対核家族	自由（と不平等）	労働党社会主義 （ゼロ社会主義）	自由孤立主義	—

家族型により、社会主義イデオロギーのタイプが異なる

フランスの社会主義……革命的急進主義（無政府主義）

イギリスの社会主義……労働党社会主義。早くからフランス革命の平等の原則に反対。社会の変革を望まず、階級としての労働者を維持

ドイツの社会主義……社会民主主義。社会を階層構造をつくるのが当たり前。階層社会を受け入れる強い統合力と改良主義として。統合的な家族から統合的な党へ

イタリアの社会主義……共産主義。共同体家族の価値を体現した「世界的な」社会主義

家族型により、民族主義イデオロギーのタイプも異なる

フランス……ボナパルティズム、プーランジェ主義、ドゴール主義

ドイツ……ナチズム（ホロコースト）

イタリア……ファシズム（ファシスト党）

## ●トッドによる移民論……アメリカ・イギリス・ドイツ・フランス

### ▼『移民の運命』

『新ヨーロッパ大全』（1992）で近代ヨーロッパを家族型から考察し、最後に移民の問題に触れた

それを発展させたのが『移民の運命』（1994）

アメリカ、イギリス、ドイツ、フランスにおける移民への対応を比較し、各国の対応の違いを示す

移民を隔離したり、排除したりするのではなく、同化すべき

フランスは独善的に同化を押し付けるのではなく、「率直で開かれた同化主義」を



## ●アメリカ……絶対核家族の差異主義

### ▼アメリカはアングロ・サクソンの「絶対核家族」

子どもが成人に達したら親元を離れて独立した世帯を持つ

遺産は遺言によって特定の子どものみに残され、兄弟姉妹が均等に相続することがない

親子、兄弟の縁が薄いので、自由・独立の精神が涵養

人間の平等には無関心で、逆に人間の差異に敏感になる

人間や民族はそれぞれ異なっていると見なす

だから人種差別が起こりやすい

### ▼黒人を差別することで、黒人以外（白人）の平等を達成

1992年の統計では、アメリカの黒人男性の外婚率（白人と結婚する率）は4.6%、黒人女性では2.3%

1990年の乳児死亡率は、白人が8.1‰、黒人が16.5‰

黒人は劣悪な環境に隔離されている

アメリカではユダヤ人を含むヨーロッパ人は互いに自由に結婚する

アメリカ先住民およびアジア系アメリカ人は戦前は外婚率が低かったが、戦後は上昇し、白人に統合された

1990年のアメリカ先住民女性の外婚率は54%、1980年のカリフォルニア州の日系人女性は36%

隔離の理由が低教育ではなく肌の色であることが明らかに

黒人は識字率が低かったが、20世紀に入ってから50%を超え、同時代のイタリア人より高くなった

しかし、イタリア移民が白人として受け入れられるのに、黒人は隔離され続ける

絶望が黒人を家庭崩壊と自殺的行動に追いやった。

### ▼直系家族民族も絶対核家族に移行

ドイツ人、スウェーデン人、ユダヤ人、日本人などの直系家族民族は子どもに対する権威が強い

アングロサクソンの絶対核家族に対して、教育上有利

急速に中上層に入り込むことになる

数世代が経つと絶対核家族に移行し、急上昇は止まる。

いかなる移民も、受け入れ社会の家族型に移行するのを阻止できない

## ●イギリス……絶対核家族の差異主義

### ▼シーク教徒（インド系）は、イギリスに統合

主要な移民は、シーク教徒（インド人）、パキスタン人、ジャマイカ人

シーク教徒は直系家族であり、アメリカのユダヤ人や日本人と同じく、急速に中流に入り込んだ

イギリスの乳児死亡率が7.5‰であるのに対し、母親がインド生まれの乳児死亡率は7.4‰

出生率は1990年に2.2にまで落ち、西欧化を果たしている。

インド系二世の男性の外婚率は16%

いずれイギリス統合されると見られる

### ▼統合が進まないパキスタン系移民

パキスタン人は内婚制共同体家族であり、いとこ婚を優先

両親と複数の兄弟夫婦とその子どもたちが同居する大家族

兄弟間の相続は均等

内婚制共同体家族は、イギリスの絶対核家族とは正反対の家族型

イギリス社会に同化しにくく、社会的に隔離・疎外されやすい

1990年の在英パキスタン人の出生率は4.0 → 近代化が及んでいない

乳児死亡率は14.2‰

二世の男性の外婚率は19%。シーク教徒より高いが、高い出生率のため純粋なパキスタン人は増え続ける。

このような隔離がイスラム原理主義の温床となる

2005年7月のロンドン同時多発テロを見事に予言

## ▼黒人とみなされるジャマイカ系

ジャマイカ人は母系寄りの絶対核家族であり、キリスト教徒

家族型と宗教から言えばイングランド人に最も近い移民

1960年前後の識字率を比べると、イギリス白人99%、ジャマイカ人82%、インド人31%、パキスタン人15%

ジャマイカ人は、移民の中では最も近代化されている

しかし受け入れ社会の差異主義により、黒人に分類される

シーク教徒やパキスタン人は差別されても自らの文化に守られる

ジャマイカ人は内面はイギリス人とほとんど変わらないため、何にも守られず、アメリカ黒人と同様に家庭崩壊が起きる

1987年・1989年のジャマイカ人男性の外婚率は15%、女性は13%

イギリスでは階級が強く、白人の平等がない

下層の白人は、ジャマイカ人と同様に中上層から疎外されているので、両者間の結婚が起こる

## ●ドイツ……直系家族の差異主義

### ▼ドイツは直系家族であり、アングロサクソンの絶対核家族よりも“粗暴な”差異主義

直系家族は兄弟の不平等を特徴とし、人間は互いに異なると認識

子どもの一人（通常は長男）が財産を相続して親と同居

それ以外の兄弟は家を出て別の仕事に就く

人間の平等には関心を持たず、差異に敏感 → 差別につながる

父親の権威は中心的権力の下にまとまることを求める → 「権威主義家族」と呼ぶ

直系家族社会は、同じ文化の小集団を被差別民として指定することができる

日本における部落民

南西フランスにおけるカゴ（Cagot）

これと似た立場にいたのがドイツのユダヤ人

宗教が異なるためいっそう疎外されていた

## ▼新たな差別を生んでいるトルコ系

アメリカが人種別統計を作成するのに対し、ドイツの統計では人間をプロテスタント、カトリック、ユダヤ教徒、イスラム教徒に分ける

ドイツへの移民のうち、トルコ人は肉体的にはイタリア人、ギリシア人とほとんど変わらないが、外婚率が低いのはトルコ人だけ

1990年には、トルコ人を父とする子供のうち母がドイツ人なのは4.4%

トルコ人を母とする子供のうち父がドイツ人なのはわずか1.2%

在独トルコ人の1984年の出産率は2.5

ほぼ同時期、在仏アルジェリア人が4.2、在仏モロッコ人が4.5、在仏チュニジア人が4.7、在英パキスタン人が5.3

移民のなかでも、トルコ系が近代化しているのは明らか

しかしその後、1990年になると、在独トルコ人の出産率は3.4に上昇

これは隔離に対する防衛反応

トルコ人に対する暴力も散発し、ネオナチによるトルコ人女性の放火殺人も起きている

## ▼逆説的に、トルコ人の隔離が別の平等を実現

ユーゴスラビア人は家族構造も宗教もドイツ人と異なるが、統合が順調に進む

1989年のベルリンの壁崩壊以降の東西ドイツ人の対立を緩和する働きもしている

ソ連の崩壊で、これらの地域に散らばって居住していたドイツ系住民がドイツに戻ってきたが、彼らもまたドイツ語が十分に話せないものの、順調にドイツ社会に同化

アメリカが黒人を不可触賤民化して差別することで、黒人以外の人種のアメリカ社会への同化に成功したように、ドイツではトルコ移民を不可触賤民化して差別することで、トルコ移民以外の移民のドイツ社会への同化が進んでいる

## ●フランス……平等主義核家族で普遍主義

### ▼フランスは平等主義核家族で、普遍主義

パリ盆地を中心とする北フランスのみ

子供が成人すると親と別居して独立し、親の遺産は兄弟間で平等に相続

相続が兄弟間で平等に行われることから人間はすべて平等であるという認識を持つようになる



ヨーロッパで見られる四種の家族構造をすべて持つのはフランスだけ

南フランスには「直系家族」（権威主義的）が分布

中央山塊と地中海沿岸は「外婚制共同体家族」

ブルターニュには「絶対核家族」

### ▼ドイツ的「権威主義的家族型」の文化が存在

平等主義は放っておくとアナキー（無政府主義）に陥りやすく、それを救っているのが、差異を重視するドイツ的な権威主義家族型の文化

この文化が周縁部に存在するお蔭で、フランスは国民国家としてまとまっている

最近、フランスで勢力を伸ばしている極右政党の「愛国戦線」の支持基盤は、このドイツ的な権威主義的家族型を持つ地域とぴったり重なる

### ▼1992年の調査……各移民に対してフランス人の何パーセントが敵意を持つか

最も敵意を持たれているのはマグリブ人（アルジェリア人、チュニジア人、モロッコ人）

マグレブは「内婚制共同体家族」の地域

いとこ同士の結婚が推奨されるが、そこがいとこ婚をタブー視するフランス社会（平等主義的核家族）と馴染まない

人口の10パーセントに相当する500万人もいる

しかしながら、マグリブ人女性の15.8%はフランス人と結婚

民族としては敵意を持つ人が少なくないが、隔離はまったく起きておらず、個人としてフランス人と結婚するのは問題がない

つまり、マグレブ移民とその子孫は、社会集団としてフランス社会では嫌われているものの、個人レベルではフランスへの同化が進んでいる

移民	敵意を持つフランス人
スペイン・ポルトガル人	8%
仏領アンティル人	12%
アジア人	18%
ユダヤ人	18%
アフリカ系黒人	21%
マグリブ系二世	36%
ロマ	38%
マグリブ人	41%

### ▼アフリカ黒人移民は多様であり、「黒人」という分類は無意味

父系家族のソニンケ人を主体とするマリ移民は、近代化が遅れている

一子相続で直系家族的社会を営む

在仏マリ人の私生児の比率は2%、大学生の比率は2%、出産率は10.3

在仏カメルーン人の私生児の比率は43%、大学生の比率は26%、出産率は2.6

私生児率の高さは、女性の地位の高さを示す

低い出産率は、近代化が完了していることを示す

マリ人を父とする子供のうち母がフランス人なのは2.1%、セネガル人では6.2%、その他のアフリカ人では16.7%であり、明らかにマリ人の統合が遅れている

### ▼フランス人は、混血への無頓着

「黒人によるフランスの侵略はまことに急速に進展したので、いまやヨーロッパの地にアフリカ国家が誕生したと、紛れもなく語ることができる」（ヒトラー『我が闘争』）

フランスの同化作用は個人に働くものであるため、移民社会は容赦なく破壊される。

マグリブ人は父系内婚制共同体家族で普遍主義であるが、北フランスの双系外婚制の平等主義核家族とは正反対であり、普遍主義同士で衝突することになる。

### ▼平等主義核家族の自由で平等な価値観は移民にも与えられる

少数派が弱者として暴力を受けるのに甘んじることはなく、移民も反撃する

多数派から少数派へ一方的に暴力が加えられる差異主義のアメリカ、イギリス、ドイツとは異なる

### ▼多文化主義では、移民問題は解決できない

移民の母国の文化を尊重し、同化を強制しない多文化主義は、結果的に移民を隔離し、受け入れ国と文化との軋轢を生む

フランスでは、「郊外」の低所得者向け団地に移民やその子孫が多数居住

フランス人（白人）の低所得者も住んでいるので、移民だけが郊外に隔離されているわけではない

イギリスのパキスタン系、ドイツのトルコ系のような、イスラーム原理主義はフランスには存在しない